清泉女子大学キリスト教文化研究所年報　第 25 巻　平成 29 年
Journal of the Research Institute for Christian Culture, Seisen University, Vol.25, 2017

相思相愛という「誤解」
―光源氏と藤壺の宮の場合―

藤　井　由紀子

The Misconception that Hikarugenji and Fujitsubo no Miya love each other

Yukiko FUJII

This paper examines the spreading of the “misconception” that Hikarugenji and Fujitsubo no Miya love each other. First, through a comparative analysis of the scene of their secret rendez-vous, I point out that the modern Japanese translations, adaptations, and comic verisons of the *Tale of Genji* have “added” Fujitsubo no Miya’s affection for Hikarugenji, which the original version does not refer to. Secondly, as the issue of the research, I conclude that, although previous studies have assumed that Waka in Hana no en no Maki shows the affection of Fujitsubo no Miya, it is not the affection, but her political thought that is clearly shown in it.

要約

本稿では，光源氏と藤壺の宮が相思相愛であったという「誤解」の浸透について検討した．まず，二人の密通場面を例に，『源氏物語』の現代語訳・小説・漫画が，原文にはない藤壺の宮の心情を「加筆」していることを確認した．さらに，研究上の問題として，藤壺の宮の「恋心」が現れているとされる花宴巻の和歌を検討し，むしろそこには，藤壺の宮の持つ政治的意識が現れており，「恋心」は読み取れないと結論づけた．

はじめに

日本のみならず世界にその名が知られる文学作品として，『源氏物語』という古典の知名度は，他のどの時代，どのジャンルの古典作品と比べても，抜群に高いものであると言ってよいだろう．それだけ有名な作品でありながら，一般読者にとって，原文でこれを読み通すことは，そのあまりの長さゆえに至難の業である．現代語訳でさえ，与謝野晶子や谷崎潤一郎によるものなどは，既にそれ自体が「正典」化していて[1]，完読したという人は限られてくる．そのため，わかりやすくリライトされた小説版，あるいは漫画や映画などで内容を理解しようとする人も少なくない．

しかし，これらのいわば「二次創作」作品には，原文にはないニュアンスやイメージが，先行する作品から後続の作品へと，くりかえし模倣・踏襲される傾向がある．それは，現代人にもわかりやすい物語世界を構築するためにやむをえないことであるかもしれないが，一方で，原典に対する「誤解」を生じさせているのは確かであろう．その最たる例として，本稿では，光源氏と藤壺の宮の関係性に注目したい．

藤壺の宮は，光源氏の父である桐壺帝の妃である．光源氏の亡き母・桐壺更衣の面影を宿すというこの女性を，光源氏は幼少時より慕い続け，のちに密通を遂げる．光源氏が藤壺の宮に恋慕の情を抱いていることは確かだが，一方の藤壺の宮の心情はどうであったのか．実は，藤壺の宮も光源氏のことを愛しており，しかし，この世では結ばれることの叶わない相手だからこそ深く自制するしかなかったのだ，という一種の悲劇的解釈が，一般に広く浸透しているように思われる．そのような理解がはたして正しいのかどうか，原文とそれに基づく創作（現代語訳を含む）を比較しながら，藤壺の宮の心情を辿っていくところから始めたい．

1．密通場面の「加筆」

藤壺の宮は,『源氏物語』の始発である桐壺巻から登場する人物であるが，その描写は，たとえば,「げに御容貌ありさま，あやしきまでぞおぼえたまへる」（119 頁）という，桐壺帝から見た様子であったり,「ただ藤壺の御ありさまを，たぐひなしと思ひきこえて」（125 頁）という，光源氏からの評価であったりと，間接的に表現されることが多く，彼女自身の心情が具体的に語られるようになるのは，光源氏との密通以後のこととなる．

まず，若紫巻における密通の場面を確認していくこととする[2].

藤壺の宮，なやみたまふことありて，まかでたまへり．上のおぼつかなかり嘆ききこえたまふ御気色も，いといとほしう見たてまつりながら，かかるをりだにと，心もあくがれまどひて，いづくにもいづくにも参うでたまはず，内裏にても里にても，昼はつれづれとながめ暮らして，暮るれば，王命婦を責め歩きたまふ．いかがたばかりけむ，いとわりなくて見たてまつるほどさへ，現とはおぼえぬぞわびしきや．宮もあさましかりしを思し出づるだに，世とともの御もの思ひなるを，さてだにやみなむ，と深う思したるに，いとうくて，いみじき御気色なるものから，なつかしうらうたげに，さりとてうちとけず，心深う恥づかしげなる御もてなしなどの，なほ人に似させたまはぬを，などかなのめなることだにうちまじりたまはざりけむ，と，つらうさへぞ思さるる．　（305 頁）

里下がりしていた藤壺の宮のもとへ，王命婦の手引きによって光源氏が忍び込む．藤壺の宮は，この事態を「いとうくて」と憂わしく思いながらも，「なつかしうらうたげ」な様子を包み隠すことができず，そうはいっても，光源氏に対して「うちとけ」ようとはしない「心深う恥づかしげなる」態度を取るのであった．

このくだり，ようやく逢うことのできた藤壺の宮に対する光源氏の心情の高まりが，「現とはおぼえぬぞわびしきや」という簡潔な表現によって描写されているが，このような箇所にこそ作家の創作心が刺激されるのであろう，円地文子は，原文ではたった一文にすぎない箇所（傍線部）を，次のように現代語訳している[3].

命婦は，どんなふうにして，多くのかしずきの眼を掠めたばかって，宮のおわします御帳台の内まで君をお手引き申上げたものか．常日頃耐えに耐え，忍びに忍びつづけてきた恋しさ慕わしさが一ときに雪崩れ落ちて，現し身も泡沫のようなはかなさに消え失せるかと思えば，また，翼をひらいて上もなく空に舞いのぼるような喜びに，わが身がわが身とさえ思われず，月日を隔てて近くに眺める宮の御顔，手にふれる御肌えさえ現のものとも思えぬやるせなさに，源氏の君の心はあやしく昏れ惑う

のであった．（235 頁）

原文では，「いとわりなくて見たてまつる」と，「見る」という動詞一語に男女の契りが暗示されているのだが，円地訳では，はかなさと喜びを同時に感じながら，藤壺の宮を間近に「眺める」光源氏の心情が，比喩を多用した流麗な日本語でつづられている．このような，大胆な「加筆」とも言える訳については，円地自身が，現代語訳の「序」において，次のように断りを述べている．

> そういうことのほかに，桐壺の更衣，光源氏，藤壺の宮，六条の御息所，空蟬などの内部に立ち入って，本文では美しい紗膜のうちに朧ろに霧りかすんでいる部分に照明を与えているのは，私自身が『源氏』を読んでいるうちに自然にそこまでふくらんでいかなければならなかった止むを得ない膨脹なのであって，こうした加筆を古典に対する礼を失した態度と見る読者もあるかも知れない．しかし，私は，奇を衒ったり，原作を歪曲したりするためにこの加筆を行なったのではない．『源氏』を読んでいる間に，それらの部分に来ると，いつも憑かれたように自分のうちに湧き立ち，溢れたぎり，やがて静かに原文の中に吸収されてゆく情感をそのまま言葉に移して溶かし入れなければいられないままにそうしたのである．その点，私にとっては，この現代語訳は，加筆の部分をも含めて，原作への純粋な愛の表現であることに何の後ろめたさも感じない．（7 頁）

「加筆」の部分も含めて，すべてが原作に対する「愛の表現」であり，そのような部分なしには現代語訳という仕事はなしえなかったという主張は，結局のところ，「現代語訳」という作業そのものが，どんなに原文に忠実な訳を心がけようとも，原文をそのままに再現することの不可能な作業だということを露呈させている．我々享受者は，そのことを理解した上で，たとえば，円地訳であれば，円地文子というフィルターを通した，『源氏物語』のひとつの「解釈」が提示されているのだということに自覚的でなければならないということになる．

ただし，この密通場面に限って言えば，藤壺の宮の心情については，そ

れほど「加筆」はされていない．「なつかしうらうたげに」という原文（波線部）が，「源氏の君に対して情のこもったやさしいお心遣いはつゆほども忘れておいでにならず」と訳されている程度である．そもそも，藤壺の宮は,「なつかしらうたげなりし」（桐壺巻･111 頁）と評される桐壺更衣に，その雰囲気までもが似ている女性として登場しているのだから，この密通の場面に現れる「なつかしうらうたげ」な様子も，彼女が本来的に持っている性格が自ずとにじみ出てしまったものだと考えられる. 円地はそれを，光源氏に対する，特別な「情のこもったやさし」さだと解釈しているのだが，それが，男女としての「情」なのか，まだ幼き日に親しく過ごした，肉親的な「情」の名残なのか，この訳からだけでは読み取れない．いまだ藤壺の心情は，原文の「紗膜」に遮られていたほうがよいと，円地は判断しているのであろう．

一方で，二人の密通箇所に，もっと積極的に藤壺の宮の光源氏への愛情を読み取ったのが，田辺聖子であった．田辺聖子は,『源氏物語』を，現代読者の「読むスピード」を重視して，単なる現代語訳以上に「わかりやすい「小説」」として仕立てたもの[4]として,『新源氏物語』を発表している[5]．田辺自身は，この作品を「口語訳」とも呼んでいるように，あくまで基本的には原文の流れに忠実でありながら，原文から推測できることについては，円地と同じく，大胆な「加筆」を行っている（あるいは，現代読者には退屈だと思われる箇所は，大幅に「省略」してもいる）．田辺は，そのような「加筆」を,「原作の脱落部分を「埋める」作業」と呼び，それが「口語訳をするときの最大のたのしみ」の一つであったと述べている[6]．

実は，先に見た若紫巻における光源氏と藤壺の宮の密通は，二度目なのである．原文の「あさましかりしを思し出づるだに，世とともの御もの思ひなるを, さてだにやみなむ, と深う思したるに」（破線部）という箇所に,「あさましかりし」という過去の出来事が回想されている．その「あさましかりし」出来事を, せめて一度だけで終わりにしようと思っていたのに，またこのようなことになってしまった，という藤壺の宮の嘆きは，読者にもまた，驚きを以て受け止められることとなる．なぜならば，一度目の密通は，これまでの物語世界に，まったく描かれていなかったからである．田辺聖子は，この一度目の逢瀬を，夕顔巻の訳にあたる「生きすだま飛ぶ闇の夕顔の巻」において，かなりの長さで書き込んでいる．里下がりして

いた藤壺の宮のもとに忍び込んできた光源氏．切々と自分の恋心を訴え，自分に迫ってくる光源氏に対し，藤壺の宮は最初は拒絶しながらも，徐々に本心を吐露せずにはいられなくなる．今，その一部分だけ引いておこう．

「あなたはそれでは，私のことなど愛しく思って下さったのではないのですね．義理に引かれて，仕方なくやさしくして下すっただけのことなのですね？　それを私は，年頃日頃，おもいちがいをしていたのか」
「いいえ，それはちがいます．ちがいます」
と宮は烈しくいわれた．
「光の君さまが元服あそばされ，もう御殿でお目にかかることがかなわなくなったとき，わたくしは，うれしかったのです．……もしあのままお逢いしつづけていたら，わたくしは，自分の心に自信がもてませんでした．光の君さまを，いつ愛してしまうかしれない心の傾きが，われとみずからおそろしかったのでございます．殿方となられた光の君さまに恋しているわたくし自身が，ありありと，目にみえるような気がしましたの……」（47 頁）

このあと，契りを結んだ後の二人の会話では，藤壺の宮は「わたくしは，いまはうれしさで死にそうです……」（49 頁）とまで述べており，光源氏に対する愛情は，動かしようのないほど確定的なものとして描かれている．

この『新源氏物語』は，その「わかりやすさ」によって多くの読者を獲得した．その影響を受けた人物の一人として，漫画家である大和和紀が挙げられる．大和は，田辺の『新源氏物語』を読み，このような形であれば『源氏物語』は漫画にもできるのではないかと「開眼」したのだという[7]．そうして生み出されたのが『源氏物語』を漫画化した『あさきゆめみし』であった[8]．

『あさきゆめみし』では，一度目の逢瀬は描かれない（ただし，密通場面に先立って，光源氏が藤壺の宮の部屋に押し入り，愛の告白をして強引に口づけをするシーンが「加筆」されている）が，若紫巻の密通場面において，明らかに，田辺訳の一度目の逢瀬の場面の影響が見られる．当該箇所の，藤壺の宮の台詞のみ抜いてみる．

わたくしは……　あなたがご元服なさったのがうれしかった……
もう……　御殿で……　あなたと顔を合わせずにすむことが……
もしもあのまま……　時を過ごしていたら……
わたしは……　どうして……
人の世の則を越え……　罪におちても……
……愛さずにはいられなかった……
あなたを……　(204 頁)

光源氏が元服したのが嬉しかった，なぜならば，そのまま会い続けていれば，光源氏を愛さずにはいられなかったから，という，屈折した愛情表現は，「小説」から「漫画」へと媒体を変えつつも，田辺から大和へと確かに継承されているのである[9]．『あさきゆめみし』は，累計 1700 万部以上の売り上げを記録しているとされ，現代における『源氏物語』のイメージの固定化に，大きな役割を果たしていることは間違いない．その根底に，田辺の「「埋める」作業」があったということになる．裏返せば，それは，原文には「ない」箇所の定着であり，原文の「誤解」の源ともなるものである．

田辺自身は，「「埋める」作業」を「私訳」とも呼んでいるが[10]，少なくとも，狭義の「現代語訳」からは外れてしまうという点において，円地訳にも「加筆」に対する同様の姿勢が見られたことも併せて考えると，作家が古典を訳すことの功罪については，改めて問われなければならない点が多々あるように思われる[11]．

とまれ，今，確認しておかなければならないことは，若紫巻の密通場面において，原文では，藤壺の宮の光源氏に対する愛情は確認できないこと，もしそこに明白な愛情表現があるようなイメージが浸透しているとするならば，それは，「小説」や「漫画」からの影響が大きいということである．そして，「小説」や「漫画」で『源氏物語』の楽しさを知った読者のほとんどは，原典までは辿ろうとしない，すなわち，その「加筆」の部分に気づかないというのが，残念ながら事実なのである．

2. 藤壺の宮の「恋の」和歌

前節では，若紫巻における光源氏と藤壺の宮の密通場面を取り上げ，原

文には藤壺の宮の心情が具体的には描かれていないことを指摘したが，しかし，このあと，原文にも，藤壺の宮が本心を語る場面があるとされている．それが，花宴巻の冒頭部である．

中宮［＝藤壺］，御目のとまるにつけて，春宮の女御［＝弘徽殿］のあながちに憎みたまふらむもあやしう，わがかう思ふも心うしとぞ，みづから思しかへされける．
　　おほかたに花の姿をみましかば露も心のおかれましやは
御心の中なりけんこと，いかで漏りにけむ．（425 頁）

宮中において桜の宴が催され，男性貴族たちが漢詩を披露する．その場の華となったのは，誰よりも見事な漢詩を詠んだ光源氏であった．その晴れ姿を見つめながら，藤壺の宮が物思いにふけるくだりである．引用箇所の最後に「御心の中なりけんこと，いかで漏りにけむ」とあるように，ここでは，和歌も含め，藤壺の宮の「御心の中」の描写がなされており，円地文子は，「藤壺の場合には珍しい」「積極的な恋の表現」だと位置づけている[12]．当該箇所の円地訳を引いておこう．

中宮も源氏の君の眩しいまでにはなやかな舞姿や似るものもない優れた詩才が見まいとしてもお眼にとまり，聞くまいとしてもお耳に入る．弘徽殿の女御がこの君を無性にお憎みになるのも訝しく，さればといって，自分がこのように恋しく思うのも疎ましい宿世とお思いめぐらしになるのであった．
　　おほかたに花の姿を見ましかばつゆも心の置かれましやは
この歌は中宮のお心の底の声ではあったに違いないのに，隠しぬかれたはずのものがどうしてよそに洩れ出でたものであろうか．
〔和歌注〕＊何ごともなくてこの美しい姿を見るのであったならば，さぞ楽しいであろうに．（355 頁）

参考までに，田辺訳も引いておく．なお，田辺訳では，和歌は心内文に吸収される形で散文として処理されている．

中宮も，内心，動揺していらした．源氏の舞姿の美しさや，ゆたかな才分のほとばしりを，今さらのように目の当りにされ，必死にわが手で封じこめていらっしゃる心の底の恋が，また燃え上るのである．
この，心にやましい秘めた恋がなくて，源氏を見るのなら，どんなにかはればれと，この宴席の人々と同じように源氏を賞めそやしたろうものを，とひとりお心に辛く思われた．（173 頁）

いずれも，「自分がこのように恋しく思う」（円地），「必死にわが手で封じこめていらっしゃる心の底の恋」（田辺）と，原文では「わがかう思ふ」としか書かれていない箇所に，藤壺の宮の「恋心」を読み取っていることは動かない．これもまた，作家独自の想像力によるものだと考えたくなるのだが，ことはそれほど単純ではない．現代の研究者による現代語訳も，ほぼ同様の解釈を示しているからである．新編日本古典文学全集（小学館・1994 年）の現代語訳を挙げておく．

中宮は，君の姿にお目のとまるにつけても，東宮の女御のどこまでもこの君をお憎みになるのが合点ゆかず，またご自身がこうして君に心ひかれるのも情けないことよと，自ら反省せずにはいらっしゃれないのだった．
　　おほかたに……（もしも世間の人並にこの花のようなお姿を見るのであったら，露ほどの気がねもなく心ゆくまで賞賛することができたであろうに）
心中ひそかにお詠みになったのであろうが，これがどうして世間に漏れ伝わったのだろうか．（355 頁）

ここでも，原文の「かう思ふ」は，「こうして君に心ひかれる」と，光源氏に対する「恋心」として訳されている．実際，この場面は，藤壺の宮の「光源氏への恋情らしきものがようやく確認される」箇所であると位置づけられ[13]，「これまでよりもずっと深い彼への愛の自覚が描かれている」などとも評されている[14]のである．しかし，はたしてそのような理解は正しいのであろうか．

この「わがかう思ふ」の解釈については，既に別稿[15]で詳しく論じた

ので，本稿では深く取り上げない．結論だけ述べれば，室町時代の注釈書以降，ここで藤壺の宮と対比的に語られている弘徽殿女御は「悪后」としてマイナスのイメージが固定化していくこととなる．よって，その弘徽殿女御が光源氏を「憎む」のであれば，理想の女性たる藤壺の宮は，それと正反対に彼を「愛す」のが当然であるという無意識の思い込みの定着が，「かう思ふ」と指示語で示されているだけのこの箇所に，藤壺の宮の「女心」を読み取る要因になっているのである．「かう思ふ」は，弘徽殿女御が光源氏を憎み，自分もまた光源氏を手放しで賞賛できないやましさを表しているのであって，中宮という立場にある藤壺の宮の，極めて政治的な配慮を感じさせる箇所であると考えられる．

では，そのような文脈理解の上で，そのあとの和歌はどのように解釈すればよいのであろうか．ここで，巻を一つ遡って，紅葉賀巻を見ておきたい．紅葉賀巻の冒頭では，朱雀院行幸の試楽が描かれ，光源氏が「青海波」を舞う有名な場面が置かれる．花宴巻の冒頭部と対応しつつ，光源氏の青春の絶頂期を描くものとして位置づけられるのだが，その試楽の翌日に，光源氏と藤壺の宮の和歌の贈答が描かれている．

> つとめて中将の君［= 光源氏］，「いかに御覧じけむ．世に知らぬ乱り心地ながらこそ．
>
> もの思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の袖うちふりし心知りきや
>
> あなかしこ」とある御返り，目もあやなりし御さま容貌に，見たまひ忍ばれずやありけむ，
>
> 「から人の袖ふることは遠けれど立ちゐにつけてあはれとは見き
>
> おほかたには」とあるを，限りなうめづらしう，かやうの方さへたどたどしからず，他の朝廷まで思ほしやれる，御后言葉のかねても，とほほ笑まれて，持経のやうにひきひろげて見ゐたまへり．（385 頁）

光源氏から送られた和歌に，その舞姿の美しさを無視することはできず，藤壺の宮は珍しく返歌をする．その返歌は，光源氏の舞姿を「あはれとは見き」と肯定的に評価するものであり，「あはれ」の意味の取り方によっては，たしかに光源氏に対する「恋の表現」であると考えられなくもない歌となっている．

しかしながら，その歌のあとに，「おほかたには」という言葉が付されていることに注意したい．この「おほかたには」という言葉には，古注以来，二通りの解釈が示されている．一つは「おほかたにはあらず」の「あらず」が省略されていると取るもの．並々ではありませんでした，の意となり，歌に詠まれた「あはれ」がさらに強調されることになる．もう一つは，「おほかたには」が「あはれとは見き」と倒置になっており，「おほかたにはあはれとは見き」の意であると解釈するもの．こちらの解釈では，いったん「あはれ」と示された感動が，「おほかたには」によって一般化されることになる．

現代の活字テキストの注では，たとえば，新日本古典文学大系（岩波書店・1993 年）が「「大方にはあらず」（並々の思いではない，の意）の略．一説には「大方には見き」とする」（242 頁）という注を付しているように，両説を紹介しつつも，前者の解釈を取るものが多い．しかし，もし，そのような露骨な愛情表現（とまではいかずとも，藤壺の宮個人の強い感動表現）がなされた手紙であったとすれば，光源氏の喜びもまた，もっと露骨なものであるはずではないだろうか．光源氏は，この手紙を見て，「御后言葉のかねても」と「ほほ笑」んでいる．この「御后言葉」は，和歌の前半の「から人の袖ふることは遠けれど」の部分を指し，唐楽である「青海波」の「古事」を引いた，藤壺の宮の漢籍教養を賞賛したものと考えられるが，それに加えて，まだ中宮とはなっていない藤壺の宮が，既に「后」のように臣下の舞姿を褒める態度で歌を送ってきたことに，光源氏は思わず「ほほ笑」んでしまったのであろう．決して，自分への積極的な愛情が感じられたから笑ったわけではない．さらに，「おほかたには」という言葉が添えられたことによって，二人の関係の隠匿性が保たれるという配慮も十分に理解しているからこそ，「持経のやうにひきひろげて」この手紙を見ているのだと考えられる．やはりこの「おほかたには」は，後者の解釈，すなわち，一般的に見て感動しました，という藤壺の宮の客観的な立場の強調を読み取るべきであろう．

ここで，もう一度，花宴巻で詠まれた藤壺の宮の和歌を引いておく．

おほかたに花の姿をみましかば露も心のおかれましやは

紅葉賀巻と花宴巻の冒頭部は，さまざまな面で対応し合っている．だとすれば，この和歌の初句「おほかたに」は，紅葉賀巻の和歌に添えられた「おほかたには」を踏まえたものであると見て間違いないだろう．藤壺の宮は和歌を詠む直前に，これまでの自分の光源氏に対する態度を「思しかへ」している．和歌もまた，紅葉賀巻の和歌を「思しかへ」すところから始まっていると考えたい．先に自分は「おほかたに」光源氏の姿を見て「あはれ」と感じたという手紙を送った，しかし，ほんとうに「おほかたに」あの花のような姿を見るのだとしたら……，と，上の句は解釈できる[16]．

問題は，後半の下の句である．ここにも，古注以来の解釈の揺れがある．「心のおかれましやは」という箇所に含まれる「心おく」という表現には，大別して，対象に「心をかける」という意と，対象から「心を隔てる」という意の，両極の解釈が成り立つのである．前者の解釈の根拠には，『古今和歌集』の紀貫之の和歌がある[17]．

弥生ばかりに，もののたうびける人のもとに又人まかりつつ消息すと聞きて，よみて遣はしける

露ならぬ心を花におきそめて風吹くごとに物思ひぞつく

（巻十二・恋二・589）

たしかに，「露」「花」「心」「おく」という表現が重なり合うこの歌は，『源氏物語』に影響を与えていると考えても不自然ではない．ここでの「心を」「おく」という表現は，「花に」心をかけるという意になっていて，この歌を援用すれば，藤壺の宮の歌もまた，光源氏の「花の」ような「姿」に心をかける，の意となる[18]．ただ，藤壺の宮の歌は，「やは」という反語表現を伴っていて，「心おく」を「心をかける」の意で取った上で，全体を解釈すると，世間の人並みに光源氏の姿を見ていたら，心をかけることはないのに，という大意になる．しかし，これは不自然ではないか．光源氏の姿は，紅葉賀巻でも花宴巻でも，世間の誰もが称賛しているのである．「おほかたに」見たところで，その姿に心惹かれることを否定できるものではない．それは，歌の直前で，称賛すべきその姿をあえて「憎む」弘徽殿女御を「あやし」と評した，藤壺の宮自身の姿勢とも矛盾するものと考えられる．

和歌史において，「心おく」が「心をかける」の意で用いられることが大半であった『古今和歌集』の時代から，『後撰和歌集』になると「心を隔てる」の意が増加していくことが指摘されている[19]．『源氏物語』は，「心を隔てる」の意の「心おく」表現が定着していく時代の作品であった．実際に，『源氏物語』における「心おく」表現を辿り見ると，そのほとんどが「心を隔てる」の意で用いられているのである[20]．だとすれば，やはり，この藤壺の宮の歌もまた，「心を隔てる」の意で解釈するのが自然なのではないか．ここで，私訳を提示しておくこととする．

世間の人と同じようにあの花のような光源氏の姿を見るのだとしたら，どうして露ほども心を隔てることがあろうか．私は絶賛しなければならなかったのに．

先にも述べた通り，この歌に示されているのは，直前の心内文と同じく，紅葉賀巻における自分の態度の「思しかへ」しなのである．あのとき，私は「おほかたに」と付け加えることによって，一般的な感動として光源氏に「あはれ」を伝えたが，どうしてそのようなことをする必要があったのか，ほんとうに「おほかたに」見ていたとすれば，むしろ，手放しで賞賛しなければならなかったのだ，と．

花宴巻における藤壺の宮は，既に光源氏との密通で孕んだ子を出産し，自身も中宮という地位について，ひとまず安定した立場にある．その落ち着いた状況から，まだ懐妊の身であった時点での自身の言動を振り返り，冷静な目でそこに矛盾を見出しているのである．それは，自身が政治的な存在であることを自覚しているからこそ生まれた感慨なのであり，密通のやましさから光源氏を愛でることをためらってしまう自分の心情を，「后」という立場にある人間にはふさわしくないものとして捉え直しているものだと考えられる．

そこには，光源氏への「恋の表現」は，ない．藤壺の宮の思いは，永遠に「美しい紗膜のうちに朧ろに霧りかすんでいる」のである．

おわりに

本稿では，まず，光源氏と藤壺の宮の密通場面を対象に，『源氏物語』

の原文に対する「誤解」が，現代語訳・小説・漫画などで，原文にはない「加筆」部分がくり返し模倣されることによって生み出されていることを確認し，つづいて，藤壺の宮の「女心」が現れているとされる花宴巻の和歌を検討することで，そこに直接的な愛情表現は見られないことを指摘した．

ただし，なぜこれほどまでに，藤壺の宮が「おほかたに」という自分の言葉に拘らなければならなかったのか，なぜ光源氏の姿を堂々と賞賛することにためらいを感じてしまったのか，原文には書かれていないその先を考えるときに，内に秘めた藤壺の宮の「女心」は浮かび上がってくるのかもしれない．しかし，それは，読者それぞれの「読み」の問題である．『源氏物語』の本文は，あくまで禁欲的に，藤壺の宮の姿を描き出しているのであった．

注

1　河添房江「越境する翻訳と現代語訳」（『源氏物語時空論』東京大学出版会　2005 年）
2　『源氏物語』の本文の引用は，日本古典文学全集（小学館）に拠る．
3　円地文子『源氏物語』（全 10 巻）は，新潮社から 1972-1973 年に刊行された．本文の引用は，新潮文庫版（巻一・1980 年）に拠る．
4　田辺聖子「「源氏」は面白い小説か？」（『源氏紙風船』新潮社 1981 年）
5　田辺聖子『新源氏物語』（全 5 巻）は，新潮社から 1978-1979 年に刊行された．本文の引用は，新潮文庫版（上・1984 年）に拠る．
6　田辺聖子「源氏という男」（前掲注 4 書）
7　大和和紀インタビュー「『あさきゆめみし』のすべてを語る」（『完全保存版 あさきゆめみしの世界』宝島社 2016 年）
8　大和和紀『あさきゆめみし』（全 13 巻）は，講談社（KCmimi）から 1980-1933 年に刊行された．本文の引用は，講談社漫画文庫版（1・2001 年）に拠る．
9　2001 年に公開された映画『千年の恋 ひかる源氏物語』（監督･堀川とんこう／脚本･早坂暁）にも，光源氏と藤壺の宮の密通シーンに，田辺の「加筆」部分の影響が見られる．立石和弘氏はここに「『源氏物語』の加工作品が新たな典拠となり，原典の『源氏物語』を置き去りにしながら，さらなる加工文化を生産していくサイクル」を見て，「原典にはない表現が使い回しされて，大衆文化における『源氏物語』のイメージを定着されている」と指摘している（「映画化された『源氏物語』」（立石

和弘・安藤徹編『叢書・〈知〉の森 5 源氏文化の時空』森話社 2005 年)).

10　田辺聖子「埋める作業」(前掲注 4 書)

11　この密通場面について，円地訳・田辺訳に，与謝野晶子訳(『新新訳源氏物語』1938-1939 年）と橋本治訳(『窯変源氏物語』1991-1993 年）を加えた四種の現代語訳を対象とした比較が，次の論文でなされている.

立石和弘「『源氏物語』の現代語訳」(前掲注 9 書)

また，特に「女流」の現代語訳についての問題提起を含むものとして，以下の論考を参照のこと.

宮内淳子「『源氏物語』の現代語訳と「女流」の領域―戦後の女性作家による現代語訳をめぐって―」(伊井春樹監修・千葉俊二編『講座源氏物語研究第 6 巻 近代文学と源氏物語』おうふう 2007 年)

鈴木直子「円地文子と『源氏物語』―「女流」という磁場をめぐって」(『国文学解釈と鑑賞 特集・『源氏物語』危機の彼方に』924 2008 年 5 月)

吉井美弥子「田辺聖子と古典文学―いにしえを今に織りなす『新源氏』の論」(『読む源氏物語 読まれる源氏物語』森話社 2008 年 9 月)

12　円地文子「源典侍考」(『源氏物語私見』新潮社 1974 年)

13　陣野英則「「紅葉賀」巻における不分明な「御心の中」」(西沢正史監修・上原作和編『人物で読む『源氏物語』第 4 巻 藤壺の宮』勉誠出版 2005 年)

14　荒木浩「胡旋女の寓意―紅葉賀の青海波」(『かくして『源氏物語』が誕生する―物語が流動する現場にどう立ち会うか』笠間書院 2014 年)

15　拙稿「藤壺の宮の「女心」―注釈史における弘徽殿大后との対比的イメージをめぐって―」(『中古文学』96 2015 年 12 月)

16　同様の解釈を示すものとして，以下の論考が挙げられる.

鈴木宏子「葛藤する歌―藤壺宮の独詠歌について―」(『王朝和歌の想像力―古今集と源氏物語―』笠間書院 2012 年)

ただし，本稿で提示する解釈と鈴木氏の解釈は，下の句において異なっている.

17　『古今和歌集』の本文の引用は，新日本古典文学大系（岩波書店）に拠り，読解の便宜のため表記を改めた.

18　この貫之歌を挙げて，「今の源のすがたのすぐれたるによりて，心にかかると也」と解釈した『細流抄』は，しかし，「ちと心得難歌也」と解釈上の疑念も呈している. 現代において，貫之歌を積極的に引歌と認定し，「心おく」を「執着する･愛着する」の意に解したものとして，以下の論考が挙げられる.

木船重昭「藤壺宮 立后以後」(『源氏物語の研究 続』大学堂書店 1973 年)

19 鈴木宏子「〈心を置く〉という和歌―愛情と隔意のはざま―」(前掲注 16 書)

20 全 51 例中,「心をかける」の意で用いられているものは，わずか 2 例である．そして，その 2 例はいずれも六条御息所の「執心」を表すものであり，中川正美氏は,それを,「確かな人物造型」によるものだと位置づけている(「源氏物語の「へだつ」と「心置く」―心理的関係構築の基底―」(『国語語彙史の研究』30 和泉書院 2011 年)).

【付記】本稿は，品川区・清泉女子大学キリスト教文化研究所共催「第 34 回土曜自由大学（秋のコース）―テーマ:「誤解」―」(2016 年 10 月 22 日)において，同題で講演した内容を基にしたものである.